

管内一農場における牛ウイルス性下痢対策の取組と

効果：岡山県井笠家保 錦織拓美、横内淳一郎

大規模乳肉複合農場において、平成30年度バルク乳スクリーニング検査で牛ウイルス性下痢(BVD)陽性。全頭検査(1,509頭)により持続感染牛(PI牛)2頭摘発。淘汰後12ヶ月間の産子検査でPI牛8頭摘発。当初農場は自主淘汰に難色を示すも、再三の協議と丁寧な説明で対策の必要性を理解。以降、導入牛及び導入牛産子検査を継続し、さらにPI牛15頭摘発(令和4年12月最終摘発)。当農場は初妊牛を全て県外導入し、肉用子牛を多数生産。そのため毎週行う産子検査は、令和2年から検体を血清から耳片に変更、さらに検査を当家保で実施し、検査業務の効率化・迅速化を実現。対策以降、子牛の死廃率は減少。和牛子牛の四ツ☆子牛認定率は上昇し、市場価格の底上げに貢献。農場はBVD対策の効果や必要性を実感。当農場は県下最大規模の酪農場かつ肉用子牛供給農場であり、本病まん延防止を図るため本対策の継続は重要。